

21世紀EUの展望と課題



東北大学大学院経済学研究科教授

たなか そこう
田中 素香

本稿は、1月22日に行われた第1449回定例午餐会の講演要旨を事務局でとりまとめ、講師のご校閲をいただいたものです。

はじめに ユーロ現金の登場

に決済口座はなく、各国銀行は従来どおり自国の中央銀行の口座で決済を行う。ユーロはその各国のシステムをつなぐものである(図1参照)。

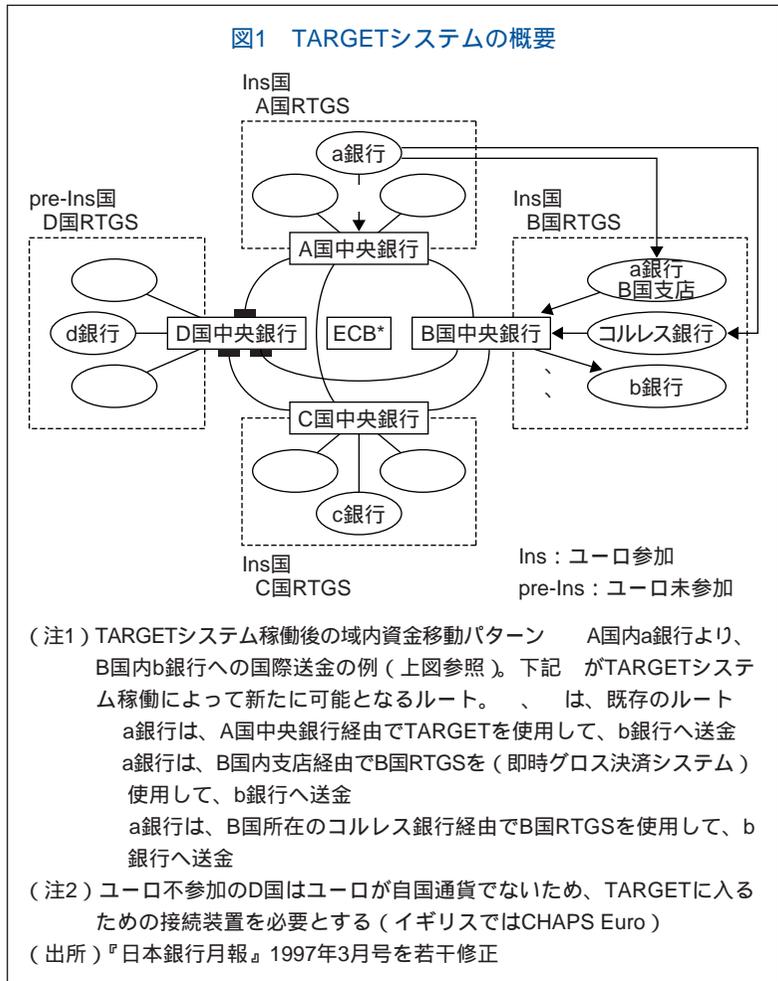
ユーロ現金の流通が2002年元旦に始まった。

3億人が使用する通貨「ユーロ」の紙幣148億枚、硬貨24万トンの導入は、一過性の混乱を除きおおむね順調に進んでいる。2月末まではユーロ現金と各国現金の混合流通であるが、3月からは12カ国すべてでユーロだけの流通となる。

通貨を流通させるのは国家と相場が決まっているが、EUは経済統合が進んでも国家にはなっていない。ユーロの流通ではEUが国家の役割を果たしており、法的にはマーストリヒト条約やEU法令などがあって、争いが起これば欧州司法裁判所が扱う。

連邦型の欧州中央銀行(ECB)は物価安定を目標に運営され、政策決定はするが実際のオペレーションは各国中央銀行が行う。 ECB

図1 TARGETシステムの概要



1 経済統合による EU経済の活性化

ユーロ参加の条件に合格するため、EU諸国がマクロ経済政策実績の改善を1990年代後半に必死に追求したため、現在のEUのマクロ経済政策環境は、物価安定、財政赤字大幅縮小が実現し、過去30年来最良の水準にある（図2参照）。

このEUの好調ぶりは、米国主導のグローバリゼーションが進展し競争が激化するなか、経済統合の実現により、米国に対抗し、80年代のヨーロッパ病から立ち直ったためである。市場統合前のEUはナショナリズムが強く、物価安定主義のドイツと経済成長優先のフランスが対立していたが、経済・金融自由化の潮流、そしてソ連崩壊後の世界の潮流にヨーロッパも順応せざるを得なくなった。中小国が多く、当時統一前のドイツが人口6,000万人と日本の半分、独仏英のGDPを足しても日本並み、米国の本格的攻勢や日本の強烈な輸出攻勢などから、ナショナリズムではやっていけないとわかると、税関も廃止、単一市場を作り域内国境を廃止すると条約に明記し、行動を開始した。

当時のリーダーだったドロール（フランス元大蔵大臣）に、ドイツのコール、フランスのミ

ッテランの長期政権がバックアップし、非常な勢いで単一市場化が進んだ。経済成長率が88年4.2%、89年、90年3%台と経済統合の威力をヨーロッパ人自身に認識させ、次に単一通貨もやれるという認識を呼び覚ました。域内に多数の通貨が並存し、各国の経済実績が異なるため為替相場の変動は不安定となりやすく、過去に経済混乱が幾度ももたらされていたためである。国際金融におけるアングロサクソンの支配力が高まるなか、このような事態を克服するためユーロ導入にこぎつけたのである。その意味で通貨統合は独仏の面子がかかったプロジェクトであった。

ユーロは経済的合理性で作られたのではなく政治的通貨だといわれるが、巨大経済領域で単一通貨であれば為替変動の心配がない。東アジアのように多数の通貨があると通貨危機でゆさぶられ大きなダメージを受ける。ユーロは政治的通貨であるのも事実だが、経済的にも十分に合理的である。ヨーロッパ社会は硬直的な社会ですぐに柔軟に対応できないことも多いが、長期的にみると世界経済、世界政治の流れをうまくとらえ的確に対応している。

2 グローバリズムとユーロ

99年から2001年半ばまでヨーロッパから米国へ直接投資、証券投資（株・債券）など巨大な資金が流れた。ユーロ金融資本市場ができたことで、IT革命で先行する米国にヨーロッパから、米国企業買収や技術提携を図る動きが大量に生じた。ユーロエリアからも巨額の資金が直接投資、ポートフォリオ投資の形で米国に流出し続け、ユーロ為替相場は99年、2000年と約2年間対ドル、対円など主要通貨に対して下落を続けた（図3参照）。これは決してユーロエリアが病人だったのではなく、バブルも含め米国が強すぎたためである。私はむしろユーロは下落して

図2 過去20年間における
失業率とインフレの動向

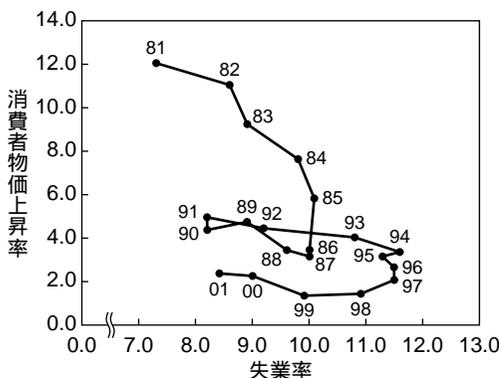
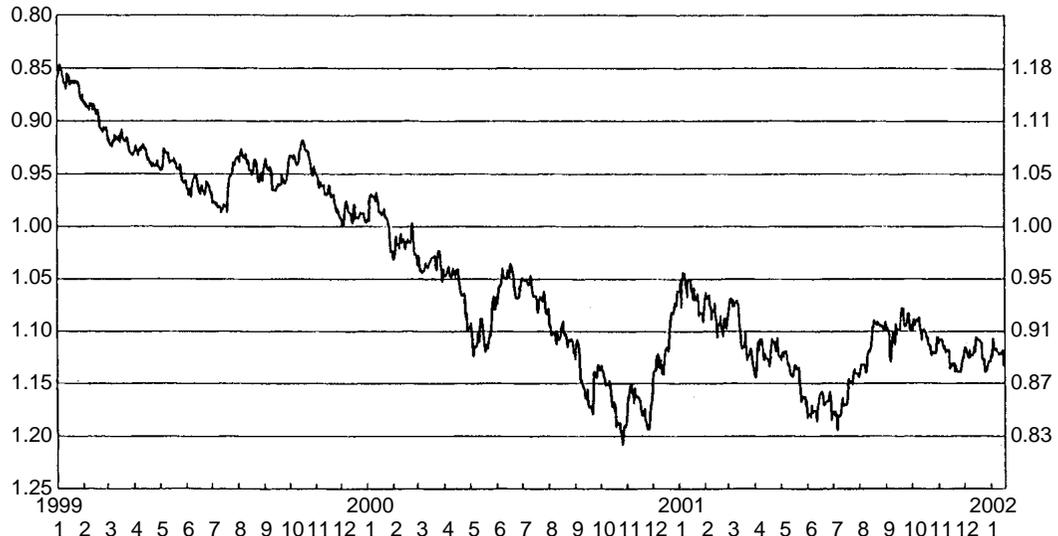


図3 ユーロの対ドル為替相場の推移 (1999.1.1 - 2002.1.17) (ドル/ユーロ)



(出所) OANDAホームページより作成

よかったと考えている。この結果ドイツ、イタリアは98年から99年にかけての輸出の落ち込みから短期間で脱出することができ、EUやユーロエリアは90年代末に比較的好調な成長率を維持することができた。「ユーロ安」は、強いドルを維持したい米国と、ユーロ導入プロセスを混乱なく前進させ導入以後もユーロエリアの景気回復を図るヨーロッパにとって都合のよいものだった。

通貨統合について、90年代には悲観的な声が多かった。英国人はやる気がなく失敗するといっていたし、米国人にとってもユーロの登場は気持ちのよいものでなかった。米英では最適通貨圏理論などもっともらしい「理論」を使用し、ユーロの失敗を予言していた。私はドイツ留学時代に70年代EU通貨統合の一次文献を読み、その後90年代初めマーストリヒト条約や欧州中央銀行法の草案と比較した。70年代の文献はまるで作文だったが、90年代初めのマーストリヒト条約や欧州中央銀行法案は本気で通貨統合を行うという確かさと熱意が伝わってきた。こうした背景から私は予定通りうまくいくと言い続

け、楽観論者と言われていたが、実際には私の言ったとおりになった。

また、ユーロの導入が成功したことで、外国為替取引高をみてもドルが世界の圧倒的な相手通貨であるにもかかわらず、ユーロがドルに匹敵する国際通貨になると過大評価する人も出てきた。しかし、そんなことがあるはずない。ユーロの発想は各国の確立したシステムをつなぐものであり、米国のような単一システムではない。米国の連邦銀行とは異なり、ECB参加各国中央銀行をつなぐシステムであり、効率面でも米国に劣る。財政政策でも、米国は景気変動時に連邦予算が動くが、ユーロでは景気に反応するのはEU予算でなく各国財政である。各国財政がばらばらに動くと大変なことになるため「経済安定・成長協定」を結んでいる。ユーロはドルと競争するために導入されたのではなく、域内の為替相場の混乱を排除しドイツの暴走を回避するため、内向きの通貨、防衛の通貨、つなぐ通貨、守る通貨として導入されたことを忘れてはならない。ユーロがドルに取って代わるかは、30年後はともかく現在では到底考えられな

い。ヨーロッパは多様で、言語も文化も異なるが、共通するヨーロッパとしての生活様式に愛着をもっており、それを守れる経済繁栄があればよいのである。EUを連邦にして米国と連合し、中国の台頭を抑えなければならないという人もいるが、そもそもヨーロッパがひとつの宇宙であり、北のフィンランドから南のイタリア、スペインなどをどうやって統治していくのか難しい問題である。

3 EUの課題と展望

当面懸念される問題を3つ挙げておくことにすると、まず第1に英国の問題がある。英国はアングロサクソン連合で金融面でも繁栄、サッチャーの遺産から経済もそれほど悪くない。英国の金融能力がユーロに行くか、ドルに追随するか。EUの牽引は独仏が中心だが、これに英国が賛成すると決定がスムーズとなる。しかし英国のユーロ参加の是非を問う世論調査では、今まで、反対が60%台、賛成が最高で30%台である。英国がユーロに入れないとすると先行きが懸念される。ユーロの国際金融面での力量からもEU統合からも、英国の参加失敗はEU全体の大問題である。ブレアは慎重にやらざるを得ない。

第2に、現在イタリアのベルルスコーニ新政権の問題である。イタリアは90年代初め財政赤字が12~13%、国債費だけで10%以上の赤字であったが、通貨統合の参加条件（財政赤字3%以下）を満たすため長い間国民に無理を強いた。ネオファシストの流れをくむ閣僚のいる新政権は、EUのいうとおりにするから生活が苦しいとキャンペーンを実施し、選挙で圧勝し誕生した。通貨統合があまりにも長い間国民を痛めつけるとういうことになる。ユーロは、当然ユーロエリア全体の経済的繁栄を保たなければならない、かつ、一つ一つの国でも経済的な繁栄が要求さ

れる。賃金・物価の弾力性にしても、不況に陥った国が同じエリアで競争力を回復するには、賃金上昇を抑制しなければならない。単一通貨が実現して態度が緩み、連帯が崩れるとユーロが動揺する。単一通貨に国家がないので、ユーロには経済的繁栄の保証が恒常的に要求され、大変である。

第3に、ドイツの財政赤字が問題である。経済成長がマイナス0.75%を超える深刻な不況下では3%以上の赤字も例外的とみなされ、翌年3%以下に引き下げることができれば問題ない。しかし今年のドイツは若干のプラス成長と予想され、昨年の財政赤字はマイナス2.5%であるため、このままでは3%を超える。3%ルール提案者のドイツに対しすでに欧州委員会から警告が出ている。あまりEU側から押さえ込みにかかる、喜んでユーロに乗り換えたドイツの国民感情が悪化しないとも限らない。

ユーロ現金流通でユーロの良い面が協調されているが、米国の不況もあり、今年はこのようないろいろな問題も顕在化してきている。

おわりに EUはどこへ

長期的には政治統合が不可避だろう。EUは中東欧へと拡大を続け、2004年には25カ国体制となる。ブルガリアとルーマニアは遅れて加盟することになっている。経済統合は効果を数字で算出し説得できるが、政治統合は国民の選好の問題もある。ここ50年間、経済統合は世界経済の動きに反応しつつ単一通貨までこぎつけたが、EUは21世紀こそ大変なのではないか。ユーロの連帯、ユーロが作り出した共通の制度を維持・発展させていかなければならず、やがて政府が必要になってくる。21世紀のEU統合は政治、軍事に移っていき、進展は容易ではないだろう。長期を要する。 ■